

くにがみ
受賞者：国頭むらづくり委員会
おおしまぐんわどまりちょう
(鹿児島県大島郡和泊町)

天皇杯
受賞年：平成4年



むらづくりの経緯

・国頭地区は、奄美群島の沖永良部島の東北部に位置し、平坦で半島状の地形をなす総世帯数371世帯、農家戸数249戸の純農村。
・昭和52年、県が提唱する「農村振興運動」に取り組み、その推進母体として当委員会を組織。「むらづくり方策」を策定し、農業振興と地域振興を地区住民総ぐるみで推進。区画整理や畑かん等農業基盤整備に積極的に取り組み、花き、野菜、さとうきび、畜産等の生産性の高い農業を実現。Uターン者が多く、担い手農家も多く確保。さらに国頭ヤッコ等の伝統芸能の保存、地区イベントの開催等を通じて地区民相互の融和とゆとりある暮らしを実現。

受賞当時

生産活動の特色

○共同(ユイ作業)によるサンゴ礁の排除、潮害の原因となっていたフーチヤの破碎、空港滑走路に降った雨水を農業用水に活用するためのため池整備、機械化に対応したほ場整備農業等基盤整備を積極的に推進。
○水を高度に利活用したテッポウユリ等の付加価値の高い切花栽培が増加。その安定出荷に向け、当地区農家を中心に「えらぶ花き園芸組合」を結成。切花とばれいしょ等の輸送野菜、肉用牛、さとうきび等を組み合わせた複合経営が定着。
○この結果、若い担い手農家も数多く確保されており(50歳未満の農家及び後継者のいる農家が130戸)、特にUターン者が多いのが特徴であり、毎年3～4人のUターン者がみられる。

地域づくりの特色

○健康づくりと地区民の融和を図るため、「元旦歩こう会」や帰省した人たちとの新春芸能発表会、地区バレーボール大会、「がじゅまる祭り」等が地区民総参加で開催されている。
○琉球文化の流れをくむ古典舞踊や民謡等伝統文化の保存等各種サークル活動も盛ん。



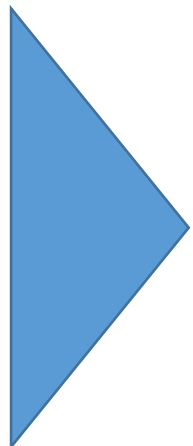
新春芸能発表会



地区バレーボール大会

～受賞直後の効果～

・芸能保存会が設立される等、伝統芸能が次世代に確実に継承されている。



現在(令和5年フォローアップ時)

評価ポイントの取組状況

○旧公民館を葬祭等の多目的施設として利活用しており、身近な地域で行われる葬儀は、交通手段のない高齢者も参加することができ、地域のぬくもりが感じられる。
○引きこもりになりがちな高齢者等向けの簡単なおかず作りを実施し、生きがいがづくりに努めている。
○令和3年3月末の地区内認定農業者数は49名で町全体数231名に占める割合は21.2%、畜産農家は27戸、多頭飼養農家が多く畜産は島内一盛んである。
○伝統芸能については、芸能保存会等を中心にイベント等で披露され、又、夏休みには運動会で披露される演目を小学生へ教えること等により継承活動を行っている。



畜産



伝統芸能の披露

今後の展開

○旧公民館での葬祭における供花や献花等を地区内の花き生産農家の生花を活用していく体制の構築を図る。

おごう
受賞者：小郷区（岐阜県中津川市）

内閣総理大臣賞
受賞年：平成4年



むらづくりの経緯

○小郷区は、旧加子母村の最北端に位置し、東濃ひのきの産地として、林業を生活の基盤に、わずかな耕地で水稻と養蚕を中心に生計を立てていた。昭和30年代には区民が基盤整備等に自主的に取り組み、その後の農業の基礎を築いた。また、区民は地元に対する誇りと愛着をもち、地元の文化、歴史を継承している。

○その後、過疎化の進む集落の将来を懸念し、農業振興をその中心に据え、収益性の高い農業を実現することを目指し、昭和40年代にトマトと肥育牛の導入を図るとともに、各種補助事業を導入して基盤整備とあわせて施設整備に着手した。

受賞当時

生産活動の特色

○中山間地域という生産条件が不利な状況の下で、品質の高い夏秋トマトをつくるために、全国に先駆け、雨よけ施設を導入した。生産組合を組織し、今後は、無農薬、高糖度のトマトを生産し、「あんみつ姫」として、ブランド化を目指した。

○肥育牛は、肉牛生産組合を組織し、高品質な和牛「飛騨牛」生産を目指した。

地域づくりの特色

○区民は、農家、非農家を含めて、区の活動を当然のことと考え、積極的に参加することで、豊かなむらづくりが行われている。

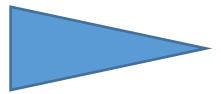
○住民の互助、協調により、中山間地の不利な条件を克服し、高冷地農業の展開、祭りや伝統文化を含めた地域活性化に取り組み、旧加子母村の他の集落へも影響を与えてきた。

○平成3年度には、「農村景観100選」に選定され、古民家を活用した民宿、村民が毎年清掃する村営のキャンプ場で、都市住民を受け入れている。

～受賞直後の効果～
・公民館に記念の石碑を設置するなど、区民のモチベーションが高まり、先進的に取り組む機運は現在に継承



受賞記念の石碑



栄養価の高いトマトを生産



安全な牛肉を生産

現在（令和5年フォローアップ時）

評価ポイントの取組状況

○トマトの作付戸数は受賞当時より減少しているものの、土壌診断を実施しバランスの良い追肥を行う等、ミネラルが豊富で栄養価の高いトマト「加子母ミネラルトマト」としてブランド化され、市場でも高い評価を得ている。主に生協や量販店が販売先で、東海地域限定でモスバーガーの指定野菜にもなっている。また、トマト組合が研修生を受け入れ、10年間で12人が新規就農している。

○肉用牛は小郷区を含む旧加子母村での飼養戸数は受賞当時より減少したものの、飼養頭数は増加している。飼育された肉用牛は「飛騨牛」として流通し、格付けが優良となったものは、輸出も行われている。

○トマト組合と肉牛組合が連携し、牛糞をトマトの肥料として活用している。

○平成24年に小郷区を含んだ旧加子母村全体で「加子母むらづくり協議会」が設立され、活動範囲、内容を広げ、加子母全体の活性化に取り組んでおり、令和元年には本表彰事業で加子母むらづくり協議会として、農林水産大臣賞を受賞している。

今後の展開

○長年の努力によって築き上げた「加子母ミネラルトマト」「飛騨牛」のブランド力を活かし、さらに付加価値の高い農産物として有利販売につなげ農家の所得と生産意欲の向上に取り組む。

○コロナ禍で中止していた小学生や都市住民のトマト収穫体験を再開するなど、農業を観光資源として活用していく。

○加子母全体のむらづくり活動は、農村RMOに発展しており、今後、農用地保全、地域資源活用、生活支援により農業振興及び地域づくりの推進に取り組む。